

資料館だより

発行所

高松宮記念ハンセン病資料館
〒189 東京都東村山市青葉町4-1-13
電話 0423-96-2909
FAX 0423-96-2981
郵便振込 00130-7-764159
高松宮記念ハンセン病資料館運営協力会

恵楓園 待労院 昔むかし写真展 生きぬいた証の数々

資料館では昨年、多磨全生園と神山復生病院の「昔むかし写真展」を開催してきましたが、その際今後も毎年、各園の写真展を順次開催することを話合いました。今年は第二弾として、菊池恵楓園と琵琶崎待労院の写真展を両施設の全面的な協力を得て開催する運びとなりました。

「恵楓園・待労院昔むかし写真展」

期日 4月19日～5月31日
場所 資料館研修展示室

琵琶崎待労院一八九八(明治三一)年、菊池恵楓園は明治四二年の創立で、私立、公立のちがいはあるものの、強制隔離収容政策の中で、共に苦難な歴史を経てきております。

園内通用券、断種、監禁

室、外出禁止、患者作業など偏見と差別に囲まれた療養所の中で、患者たちはそこを自分達の第二の故郷・骨を埋める場所として楽園にすべく、必死になつて働



お茶の時間・大正11年 待労院

いてきました。

家族舎があり、子供舎があり、治療棟があり、礼拝堂があり、また売店や炊事場、学校、娯楽室、理髪、印刷所など各種作業場もあつて、小さいながらもそこには一つの社会がありました。農耕や果樹園、養豚などの生産作業、菊花、盆栽、囲碁、将棋、野球や庭球、芝居や音楽、盆踊りや運動会など、共に病み、共に悩



馬事部・昭和22年(菊池)



監禁室・大正6年(菊池)

める者たちの泣き笑いの人生が渦巻いていました。戦後のらい予防法闘争や藤本事件、竜田寮児童の通学拒否事件など、人権回復の叫びを、この写真展は生々しく訴えております。

荷馬車(写真説明)

昭和十九年十一月、患者自治会に馬事部が設けられ菊池食糧事務所に米・麦など主食の受け取り、熊本市の市場に肉・魚・野菜等の買出しに使われた。

ガイドブック

「ハンセン病資料館」発行

昨年十一月に品切れとなつてしまいました。その後、各方面からの要望もありましたので、点検補強して再発行することになりました。再発行するものは今までの三冊を二冊にまとめ、誌名も「ハンセン病資料館」と改題、新たに「ハンセン病の知識」も加え、写真も八十枚近く挿入しました。

資料館の開館時に、ハンセン病の歴史や各療養所の紹介、資料館展示品の案内等の手助けになればと「各園の沿革」「年表」「先駆者たち、文学に生きる、事件と人物」の三冊セットを発行しました

が、好評で

ハンセン病に尽くした先駆者たち



ハンセン病への理解を深めるため、どうぞこの本をご利用下さい。この本を見れば、ハンセン病療養所の沿革、歴史、資料館の内容など大凡のことがわかることと思います。

A5判、九六ページ、定価千円。発行は四月中旬の予定です。ご注文は資料館運営委員会まで。

二周年記念つオーウム ハンセン病の歴史を探る

高松宮記念ハンセン病資料館では、昨年六月二十五日に開館一周年記念としてシンポジウム「らい予防法改正問題をめぐって」を開催、地域など内外二百人を超す参加者があり、四人の講師の話に耳をかたむけ、熱心な討議や意見発表があり盛り盛に終りました。

今年も資料館開館二周年記念として次のようなイベントを計画しました。

高松宮記念ハンセン病資料館二周年記念フォーラム
テーマ「ハンセン病の歴史を探る」

二月二十日午後五時より
コミュニティセンター(公会堂)において「柘の垣はいらぬ」出版記念会が、二百人の参加を得て盛大に開催されました。この本は、昨年暮れに亡くなられた「全生会昔」の筆者、桜沢房義氏(九五才)が生前、真言宗の三輪上人と保護者の倉橋敏夫氏に、この本の発行をつよく依頼していたもの

柘の垣はいらぬ

出版記念会

で、内容は光田健輔、小笠原登、林芳信、馬場省二、大西基四夫、成田稔、以上六人の医師の文章を集録したものです。

時代的背景や立場のちがいはあるものの、いずれもハンセン病問題に生涯をかけた献身的な活動をされた方々の記録であります。

なお、主催者より出版記念会費二十万円と本二百冊(一冊六百円)を資料館へ寄贈して頂きました。本は資料館で取り扱いをしております。

高松宮記念ハンセン病資料館では、昨年六月二十五日に開館一周年記念としてシンポジウム「らい予防法改正問題をめぐって」を開催、地域など内外二百人を超す参加者があり、四人の講師の話に耳をかたむけ、熱心な討議や意見発表があり盛り盛に終りました。

今年も資料館開館二周年記念として次のようなイベントを計画しました。

高松宮記念ハンセン病資料館二周年記念フォーラム
テーマ「ハンセン病の歴史を探る」

期日・六月二十五日(日)
13時より15時30分まで
場所・全生園コミュニティセンター(公会堂)

講師・藤田眞一先生(元朝日新聞編集委員・元帝京大学教授)
講師 藤野 豊先生(埼玉)

八十六年にわたる日本のハンセン病行政の歴史と、らい予防法との関わりなど関心の深いテーマですので一人でも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

助言者 成田 稔(資料館運営委員長)
助言者 鈴木禎一(元全患協事務局局長)
司会 平沢保治(資料館運営委員)

ハンセン病の歴史を 後世に伝えることが必要

前略、高松宮記念ハンセン病資料館では、ハンセン病に関わってきた歴史の人々、患者さんの生活の歴史がとても細かく展示されていた。

所のような扱いだっただけで、言っていたのがとても印象的だった。

発病し家族から捨てられ、無理矢理施設に入れられ、身体は病魔にむしばまれながらも、患者作業、重症患者の世話をしなくてはならず、とても辛く苦しい日々だったと思う。昔は医療も

ボランティアのハンセン病患者さんに、とてもわかりやすい説明をして頂いた。その方は何度も「昔は刑務

者、患者作業、重症患者の世話をしなくてはならず、とても辛く苦しい日々だったと思う。昔は医療も

国立甲府病院看護学校
第十八期生 T・H

私は、ハンセン病(らい)については小さい頃、母親

地元の市立青葉小学校六年の生徒達が全生園と資料館を見学(昨年11月24日)し、その時に学んだことや感想を銘々、記事にして作った新聞展を二月二十二日から三月末まで研修展示室で開催、来館者に見て貰った。

うノハンセン病のみんな新聞など。不治、天刑、見張り、監房、金券、十二畳半、大風子、プロミン、差別などの文字が見出しとし

な方や目の不自由な方がいるが—それは、病気が治らないのではなく、治った病気の後遺症です(川本望)とか「私は全生園に遊びに

「全生園新聞」「ハンセン病新聞」「こわい病氣新聞」「なんだろうな?ハンセン病人新聞」「調査新聞」「資料館をつくる苦勞」「がんばろ

全生園の人々から学ぶ 百人の百とおりの新聞

行ったり、お花見に行ったりしているけど、ハンセン病の人がいるなんて知らなかった。ひどい差別をされていた人達なのに、どうし

に「恐い病氣」としか聞かされていなかった。漢然としていた。事前に資料に目を通していたが、文章だけではイメージできなかった。しかし、今回多磨全生園の見学で、スライドや資料館の中の写真などで病氣の実態にふれることができた。

私がこの見学で一番強く印象に残ったのは資料館の見学である。ハンセン病患者は狭く、暗い、患者にとつて

て今まで気がつかなかったのだろう(秋元みち子)とか「全生園から一歩も出さないようにするためにおもちやのような金券を使わせたり、二米の高さのひいらぎの垣根でかこつたり、病人に自給自足させたり、同じ人間なのに人々の誤解から大変な差別がうまれてしまったことが—すごく残念(須田朋子)」とか、みんな

勉強したこと確かさがよく分かる内容になっていた。

とても望ましいとは言えない環境で死を迎えなければならなかった。外に出ることは許されず、強制隔離され、患者や患者の家族まで差別を受けた。しかも労働が課せられ、患者同志で看護しあうという現状だった。そこで生活しなければいけなかった患者は、どういう思いだったのだろうか。そこには人間らしく生きる姿はどこにもない。人権が全く無視されているのである。

今考えると、なんてひどい扱いをしていたんだろうと思うが、当時ハンセン病は治らない病氣と思われていたので、誤まった知識がより患者を苦しませていたのだな、と感じた。

現在では治療薬もみつかり、治る病氣になったが、こうした苦しい療養生活を強いられた患者のためにもハンセン病の歴史を後世に伝えることが必要だと思

た。

大津日赤専門学校

三年 M・K 生

来館者の声

医学の進歩素晴らしい

●主婦 75才 女性

案内された方のご説明が大変よく感動した。歴史をはじめて知った。もう少し資料を集めたい。その頃の住居(雑居部屋)が一番印象に残った。有難うございました。

●主婦 51才 女性

ハンセン病について、もう少し深く知りたいと思います。

一九四九(嘉永二年)

フランスに生まれ、一八七三(明治六)年九月、パリ

外国宣教会の宣教師として来日、最初横須賀海軍工廠

フランス人牧師の教会を司牧。同九年より北緯代牧区

(東京以北)巡回宣教師となった。その後の同十三年

西関東、東海地方を担当、その範囲は愛知、岐阜県に

及んだ。この巡回伝導の旅

ました。(写真がもう少しほしい)もつと多くの人にこのような資料館のあること

また多くの人が今も施設に入園していることを知ってほしいと思います。マスクミ等を通じて働きかけることが出来ないものでしょうか。

●会社員 31才 男性

百年以上前からのハンセ

行中、足柄街道筋の水車小屋に呻吟する盲目の女性患者との出会いから、神山復生病院の設立を決意する。

先駆者③

テスト・ウイード神父

一八七三ー一八九一

師は上司に設立許可を願うにあたり「らい患者が現世の苦しみによって永遠の

思います」と説明した。それ故牧師はこの病院に主に

おける復活「神山復生病院」

ン病の歴史がよくわかった。設備も新築だけあって素晴らしい。治療薬発見前は地獄

のようであったが、今後はどのよう明るく未来へとつながって行くのか。元患者たちの夢も聞きたい。それに開館時間が少なすぎる。もつと宣伝したり予算を工夫してつくるべきだ。

●主婦 75才 女性

感慨無量です。胸が一杯

になり涙が出て来てしまいました。医学の発達は素晴らしい。病気が恢復し一般の方々と共に暮して行かれる

生命を得ることができたら

苦しみも又幸せとなるでしょう。そのために病院を建て、そのことを教えたいと

思います。こうして誕生した神山復生病院は師の志を受け継ぎ

救らいの灯を消すことなく

百年余を経て現在に至っている。この地に日本最初の

ハンセン病療養院の礎石を

置いた師は、二年後には病を得加療のため香港へ行く

時代はすばらしいです。すね。

●学生 18才 女性 昔はひどい差別を受けていたということを知り、心が痛みました。私は今年、医者になるために医学部を受験します。医者の方について

●学生 22才 男性

ハンセン病患者ゆえに受けた様々な有形、無形の差別に驚がくした。このよう

と名付ける。こうして誕生した神山復生病院は師の志を受け継ぎ

救らいの灯を消すことなく

百年余を経て現在に至っている。この地に日本最初の

ハンセン病療養院の礎石を

置いた師は、二年後には病を得加療のため香港へ行く

が、本復を見ることなく、

明治二十四年八月四日、香港において帰天(四十二才)。



なことがあったことを今まで知らなかった。余計にショックでした。この資料館の存在をもつとアピールするべきだと思う。

◎あとがき

満開のこぶしの根元の沈丁花が甘い香りをただよわせている。桜の開花を間近かに多摩研通りの桜並木には、例年の如く大勢の花見客の申し込みがあり、資料館への来館者も多い。この機会にハンセン病への歴史散策をどうぞ。

(修)